

論考として尊重に値いする。勿論拙見とはその研究方法において、またその個々の結論において相違するところ決して少なくない。実はい、どうしてこれだけ違ふのだらうと、本書を眺めながら自らを省みている。今一つ本書の研究法の特徴は朝鮮古語の語学的説解を活用していることである。金沢・前間・小倉・鮎貝諸先生の古語研究の成果を自家薬籠中のものとして、それを縦横に駆使された個があるが、古語説解には多くの想定が含まれているとともに、それを歴史研究の上に利用するところに多くの問題がある。それには先ず言葉と生活、言葉と文化などの一層根本的な一般問題が検討されねばならない。今日新しく開拓されつつある人文諸科学がそれらに関する好テーマを提示しており、史学者もまた、それに学ばねばならぬ節々がある。それとともに新羅古代社会構造に関する論及においても、多くの補助学の知識を必要とするであらう。(五三五頁、東洋文庫発行、非売品)

—三品彰英—

Herman Lautensach, Der
Geographische Formen-
wandel. Studien zur Land-
schaftssystematik. Colloquium
Geographikum. Bd. 3. (1952)

ラウテンザッハの Geographische Formenwandel 説は、ボン大学において例年開催されるリヒトホーフエン記念談話会の、一九五一年度の席上において初めて発表されたものであるが、実はクルーテの Handbuch der Geogr. Wissenschaft の「一般地理学」の巻に、すでに現行の構想には近い見解を主張しており、爾来二十二年間、彼のとりくんできた問題である。

ここに彼のいう Geogr. Formenwandel とは Geogr. Substanz の規律的な空間的ヴァリエーションであつて、いまははやりの動態的研究のとり扱う時間的な変遷ではない。では Geogr. Substanz とは何か。——方法論をかたるには、術語の明確な概念規定が不可欠の前提であるとして、第一章「方法論的基礎理論」

は概ねボバツク及びシュミットヒューゼンに従いつつ、若干の概念規定をもつて開始される。即ち Geogr. Substanz とは地表において観相的に把握できるすべての地理的な Stoffbereich であり、その構成要素が個々の Geogr. Form であつてこれはサワラーのいわゆる Form とほぼ同義である。Form は無機界・生物界あるいは精神界のいずれの所産に属しようともそれにはかわりないもので、従来慣用の Geofaktor なる語に代るものである。

Geogr. Erscheinung なる語はこのうち特に交通・漁獵など動的な Form に対して適用される。Geogr. Raum という場合はその考察の観点の如何にかかわりなく、任意の大きさの地表の一区域をさし、Geogr. Gebiet という場合は個々の Form や Erscheinung の分布範囲をさす。また Landesnatur は当該地域のすべての無機構造物である。

ここに Land と Landschaft の概念を最初に峻別としておくことは、本論の理解のために必須のことであらう。なぜなら Formenwandel 説のとり扱うのは Landschaft であつて Land ではない。ラウテンザッハは両者を規定して Land とは空間個体 Raumindividuum

であつて、Form の Erscheinung の複合体である。Landschaft とは空間型式 Raumtyp であつて Form からは Erscheinung のうち規律的, regelhaf に把握されるものの複合体であるとする。

この Form のヴァリエーションは、多くの場合緯度や水陸の分布などの地表上の基本的な相異に関連しているが、ラウテンザッハはそのもとで Form が規律的に推移する四つの位置型式 Lagetyp を想定し、それより Form-entwandel の構造を規制する四つの方向型式 Richtungstyp をあげてゐる。① planetarische Lage. 緯度すなわち南—北位置。② westöstliche L. 大陸あるいは大洋に関し東—西位置。③ peripher-zentrale L. 同様にその中央—縁辺位置。④ hypsometrische L. フンボルトのいわゆる高度位置がこれである。

地表上において一点より他の一点へ移動すれば、二つ或はそれ以上のヴァリエーションの組成要素の属性が同時に変移するが——この属性をラウテンザッハは《カテゴリー》とよぶ。以上四つの Lagetyp に順応して Form-entwandel の四つのカテゴリーが存在するわけである。これらのカテゴリーは互に干渉

interferen して強められたり弱められたりし、共域的・同時的 synchronisch な Wandel が行われる。例へば高緯度地方では低地においてみられる植物の Form が、南欧の山系の高地に見出されることによつて、低緯度地方にも齎らされている。この例では高度が、緯度低下によつて生ずる効果を弱め、緯度上昇による効果を強めているのである。また四つのカテゴリーは大陸ごとに追突されるが、かかる大 Wandel の他に、殊に大きな島や半島については小 Wandel があらわれるとする。

この Form-entwandel は空間的にならんだ相 Phase に区分される——換言すれば各々のカテゴリーの Wandel は境界線によつて決められた若干の相より構成されるが、その相もまた当該地域の地理的位置に規制され、質的な相異や干渉の結果あらわれる強度の程度は、文字や数字をもつて記号される。右の①における同一の相は概ね東西走向の帯 Streifen を、②のそれは南北につらなる東 Streifen を、③のそれは縁辺—中心に排列する輪 Ringe を、④のそれは高度に応じた階 Stufen を形成する。

かかる方法によつて個々の地域は、四つの

カテゴリーの相を通じて規律的に把握されるが、かくて得られた一地域は一個の Raumtyp 即ち Landschaft を成し、各々の Landschaft は四つのカテゴリーの相記号のコンビネーションたる景観記号式 Landschaftsformel によつて示されるのである。例へばカタロニアは $St_1 I_1 p H_1 H_2$ なる景観記号式で表わされるが、 St_1 は①の Wandel で、夏乾燥帯 (S: Sommer trocken, 降水量 80mm 以下の月が一、二、三、四、五、六ヶ月に應じて St_2, St_3, St_4 に区分される) の第一帯に属することを示す。

イベリア半島においては、緯度によつて主に影響されるのは、南下するにつれて強化される夏乾燥の度合である。この I_1 は②の Wandel で、イベリア半島の東岸とアトラスランドより西方へかぞえて I_2, I_3 と走る Streifen の一つである。p は③の Wandel であり、カタロニアは勿論この半島では縁辺地域に属するが、イベリア半島では前述の如く半島自身においてあらわれる小 Wandel がみられるので、小文字の p で示されているわけである。最後の H_1/H_2 は④の Wandel や H_1 (500m 以下) H_2 (500~1500m), H_3 (1500~2500m) ..., H_4 (6500m 以上) に区分される高

度の Stufen の、第一階と第二階に当該地域があることを示すのである。

個々のカテゴリーの Landschaftswandel に場合には応じて遅速がみられる。すみやかな Wandel の行われる領域では、種々の相は互にみじかい間隔の中に生じ、境界線は狭く描かれる。かかる Engführung には、ひとしい Grössenordnung を Weiträumigkeit におけるよりは、より多くの Landschaften に区劃することになる。また Landschaftswandel は、全地表を全世界的なスケールで理解するのではなく、その中で各々の Form のヴァリエーションが一致し、単純な準拠によつて統一されるような地域——即ち Grossräume の中で把握される。ことに①の planetarischer Wandel は、個々の Grossräume において全く異つた夫々の観点より考察されるのである。要するにラウテンザッハの方法は Landschaft を、相のコンベンションの同一のものとして検出する操作であり、それを基底として景観区分を、つまりは地域区分を行わんとするものである。Fornemwandel 説の思想的系譜は遠く遡り、夙にリッターは „Erdkunde“ において、Erdbteil は一つの合法的な形態

をもつていて、この系譜につながる発想法を展開しているが、彼の主要な関心は Erdbteil の Individualität とその地誌にどうまつた。いついてフンボルトの „Kosmos“ では、個々の現象の上に限られたものではあるが、それだけにより明確により具体的に „Fornemwandel“ の思想の基礎づけがなされている。

temische Klimageographie の領域において、均等な地表上では等温線は平行に走るべきだという見解より出發して „Fornemwandel“ の基本的な考え方であるカテゴリーの干渉を、すでに發展させている。リヒトホルフェンは全ての geogr. Substanz をカテゴリーの顧慮のもとに描きだした最初の人であり、彼の縁辺—中心地域に関する理論より、ラウテンザッハは初めて Fornemwandel の問題に導入されたのだという。ヘットナーもまた „Grundbegriffe und Grundsätze der Physischen Geographie“ において、geogr. Form と Erscheinung の帯狀の排列を、きわめて魅力ある方法で論じている。ラウテンザッハはバツサルゲの Landschaftskunde の方法を地理学の本質にかなわぬものとして、拒否しているが、Grenzritzel Methode には多くの恩恵をうけ

ている。フォルツの基本的思想の中にも Fornemwandel の概念が使われている。即ちフォルツは彼のいわゆる《リズム》を „Fornem の変移“ として把握し、すでに干渉の概念を用いているが、しかしこの種の変移を一定の方向型式において追求し、カテゴリーの下で秩序づけるといふ思想までには發展させていない。geogr. Raumtyp と geogr. Individuum の両概念（これらは従来、明確には區別されず、Landschaft という表現の中に混在していた概念である）を峻別すべきことを、ドイツにおいて最初に提起したのはヴァイベルである。人々は地域区分を試みるに際して、あまりに屢々 Individualitäten より出發しすぎた。ヘットナーは地表の一般に妥当な区分は不可能であるとの悲観的な結論に達したが、——これは彼もまた Raumtyp と Raumindividuum の識別をななかつた故であるとする。ラウテンザッハは、以上の如き学史的展望をおこなつたのち、四つの Fornemwandel のカテゴリーを原理として、Raumtyp の観点より行えば、全地表のシステムティックな区分が可能になると主張するのである。

しかし *Formenwandel* 説の全地表への適用は本書では果されていないし、彼もまた自ら「本書の基本的な意図は、新しき方法論の提起にあり、その応用を一・二の実際の場において示し、同学のひとたちが更に地表の他の部分において、この試みを続行するよう刺激するにある」という。で、この際彼が実験の場として選んだのは、ユーラシア大陸の両端に、ほぼ対称的に位置するイベリア半島と朝鮮半島であつた。即ち第Ⅱ章・第Ⅲ章ではイベリア半島、第Ⅴ章では朝鮮半島が実地例証としてとり扱われ第Ⅳ章・第Ⅵ章では両半島の景観区分が、それぞれ周囲の地域との関連においてなされている。雙方とも彼の綿密な踏査にかかる地方であり、このように著者にとつて熟知の舞台の上で、新提案が直ちに演出されたことは、読者の理解にとつて幸であると同時に著者にとつても幸であつた。日本の景観区分も、この第Ⅵ章のうち第5節「東アジア島弧」において試みられているが、いざ舞台がわれわれには熟知の日本であつてみれば、先にくどく述べた *west-östlicher Wandel* も、景観記号式の相記号は「J」の二つで表わされ、「J」即ち *Innensaum der Ja-*

panischen Staffel (即ち裏日本)「J」即ち *Aussensaum der japanischen Staffel* (即ち表日本) という具合で、いささか杜撰の感をまねかれない(日本の景観区分図式は「人文地理」六巻六号の二四頁に転載し、簡単な紹介がある)。

第Ⅷ章「地誌的比較」では学問一般における比較方法の意義、及びリッター、フンボルト以来のこの問題に対する見解を検討し、とくにマウルとクレプスを批判したのち、ポベックならびにシュミットヒューゼンの説く如く「*Individualien* を比較することは全く不可能であり、ただ比較しうるのは *Landescharakter* のみであつて」、厳密には比較地誌学も成立しないとする。地域の一般的比較のためには *Landchaftssystematik* が前提として必要であり、それをかなえるものが即ち、この *Formenwandel* 説であるというのである。

而して終章「地理学の全体系における *Formenwandel*」では、来るべき地理学の見取図が描かれる。既往の一般地理学は、将来、一般分析的 *Formenwandel* となり、同時にそれらはより広い考察方法として一般綜合ならびに一般比較 *Formenwandel* に進むべきことが

述べられ、また完全な地誌的モノグラフは、特殊(地方的) *Formenwandel* の基礎にたつて、次の五章より構成されるべきだとする。(a) 全域の個々の *Sachbereich* について、その *Form* と *Erscheinung* の設定と説明、(b) *Formenwandelanalyse*、(c) *Formenwandelsynthese*、(d) *Formenwandel* 的考察によつてえられた特定地域の特殊な処理、(e) 全域の地誌的特性の叙述、即ちこれである。

Land の特性記述はラウテンザッハの方法の埒外にあるが、四重のカテゴリーの組合せによつてえられる *Raumtyp* の各々は、それぞれただ一回のみ現われる特異なもので、それより *Raumindividuum* 即ち *Land* への移行は容易となり、いまみた如く、その上で *Land* を処理すべく確乎たる基盤を彼は提供したといえる。

ラウテンザッハは確かに新しき地域区分の体系をうちたてた。彼の態度は、かつて地理学に属し、いまや高度な専門化をとげた諸科学によつて侵蝕された地理学を保護し、またその伝統的性格に背馳して特殊な研究部門への傾斜をみせる地理学徒に、一つの警告を發しているかの如くである。しかし、その警告を

多としながらも、私は彼の方法に対して「(自然) 地理的なあまりに地理的な」の感が湧くのを蔽いえなかつた。この方法によつて捉えられるのは *geogr. Substanz* のうち規律的な *Wandel* を逐げるもののみであり、彼自ら一地域には四つのカテゴリーの干渉像には包括されえない特色があるとし、この当該地域の個性的特色は地誌学のとり扱うべき問題領域であると表明している。とすれば、むしろ彼の設定した四重の網の目よりもれるような、個々の地域特有の性格——たとえばより複雑な社会経済的諸現象の形成する地域的構造の追求こそが、より本質的な地理学の課題ではなかつたか。

これをしもドイツ的というのであろうか、本書の読者は、著者の積みかさねゆく厳密な概念規定を一步一步追跡してゆくことを要請される。さしずめ、この稿などは、『書評』の厳密なカテゴリーには属しえず、舌たらずな『紹介』になりおわつた憾みがふかい。

—矢守一彦—

Edward Miller, *The Abbey and Bishopric of Ely*
(*Cambridge Studies in Medieval Life and Thought*,
Vol. I, 1951)

英国荘園研究はシーボーム、ウィノグラードフ、メイトランド以来古典的に画かれ尽し、今世紀に入つても此の三巨匠の成果を指標として殆どその水準以上に出る事は困難であつたが、その中にも中世荘園の地域的検討、更に個々の荘園のあり方の具体的究明の方向が示されて来、今や更に飛躍するために個々の荘園の具体的史料に立ち還らねばならない事が意識されている実情である。

此の様な段階において、前に G. C. トルトンの監修の下に *Cambridge Studies in Medieval Life and Thought* を世に贈つた劍橋大学が、今その跡を受けて *New Series* を先ず Fenland 地方に属する *Ely Abbey and Devon* 地方の *Tavistock Abbey* とに關して發表した事は実に意義深い事であり、然も英国荘園研究上極めて問題の多い二つの地方に關

して、その所謂 *non-typical manor* のあり方を究明した此の兩書の出現は、英国荘園研究に興味を抱く者の鶴首して待つた所のものではある。

今茲に紹介するものは、その中の第一巻 “*The Abbey and Bishopric of Ely*” 1951 であるが、その著者 Edward Miller は、先きに *The Estates of the Abbey of St. Alban*, 1938 及び *The Ely Pleas*, (E. H. R. 1947) を發表している事を併記しておく。

扱て本書はエリー修道院史料の説明を兼ねた第一章を除いて七つの章より成るが、以下忠実に本書を紹介する事とする。

先ず第二章 *Origin* では征服直前までの修道院の歴史を述べる。即ち、八世紀の *Bede* の教会史を參考として十二世紀に作られた年代記によれば、七世紀の中頃 *East Anglia* 王 *Anne* の娘 *Etheldreda* が南 *Gyryve* の *Tombert* に娶ひ、*Tombert* の死後寡婦資産として得た南 *Gyryve* = *Isle of Ely* に修道院を建て自ら院長となり、十二世紀に到るとあり、エリー修道院の起源を遠く七世紀にまで遡りその長い歴史を裝飾している。

所が此の年代記の記述は極めて疑わしく、